SESSION

取材・文／堀水潤一
撮影／平山 諭

選択科目の充実と探究の体系化

名城大学附属高校の新たな挑戦

志願者数において長年、愛知県の私立高校の中で常に上位に位置する、名城大学附属高校。大学進学実績も高く、人気校として知られますが、急速に進行する15歳人口の減少に備え、来年度、総合学科を募集停止し、教育内容を普通科に集約するなど、組織を再編します。そのうえで掲げるのが選択科目の拡充と、探究を核に据えたカリキュラム。令和元年から同校をリードする伊藤憲人校長は、「これまでの蓄積を体系化・合理化しただけ」と話しますが、背景にある思いや本音について、リクルートまなびDivision Vice Presidentの木村健太郎が迫ります。

Norihito Ito

×

Kentaro Kimura

「選択してから学ぶ」体制から「学びながら選択する」体制への転換

国公立大学合格者数が3ケタに その複合的な要因とは

木村：名城大学附属高校からは毎年、名城大学に300人近くが進学しています。それが強みであり、人気の理由であるわけですが、令和7年度入学者選抜では、国公立大学の合格者数が3ケタ（108人）にのぼったと聞いています。その要因をどう分析されますか?

伊藤：いくつかの要因があると思います。まず、学習指導要領の改訂で単位数が減少したことに対する学校全体の危機感や先生方の意識改革がありました。令和3年度まで、普通科（進学クラスを除く）が34単位、総合学科および普通科進学クラスが32単位で展開していましたが、令和4年度、すべての科を31単位に減らしました。不足分を補うため、3学期制を2学期制に改めることで定期試験を1回減らし、後期のスタートを8月の第4週に早めました。加えて、学校行事などを精選することでトータルの授業時数を減らさないよう工夫しました。それに先立つ令和元年度、改正労働基準法が施行されたことで、先生方一人ひとりが時間の使い方や授業改善などの工夫を凝らし始めたことも遠因でしょう。

令和4年度はまた、iPadを導入するなど、ICT教育に一層力を入れ始めた年です。これによりオンライン学習コンテンツへのアクセス頻度が上がりました。

名城大学への特別推薦制度（内部推薦）のあり方を変えたことも大きな要因です。令和7年度入学者選抜から、名城大学のすべての学部で、特別推薦を受験、合格した後、入学の権利を有しながら国公立大学（一般選抜）を受験することが可能になりました。こうした背景と生徒個人のがんばりによって国公立大学の合格者数が増えたと分析しています。

いとう・のりひと●1969年生まれ。名古屋大学農学部卒業後、名城大学附属高校に赴任。教科は理科（化学）。教育開発部長、教頭、副校長などを経て、2019年より現職。学校法人名城大学 業務執行理事。

Norihito Ito
×

Kentaro Kimura

8つのクラス・系列を一本化 選択授業を大幅に増やす

木村：その御校が、来年度から大きく組織を再編することが話題になっています。概要を教えてください。

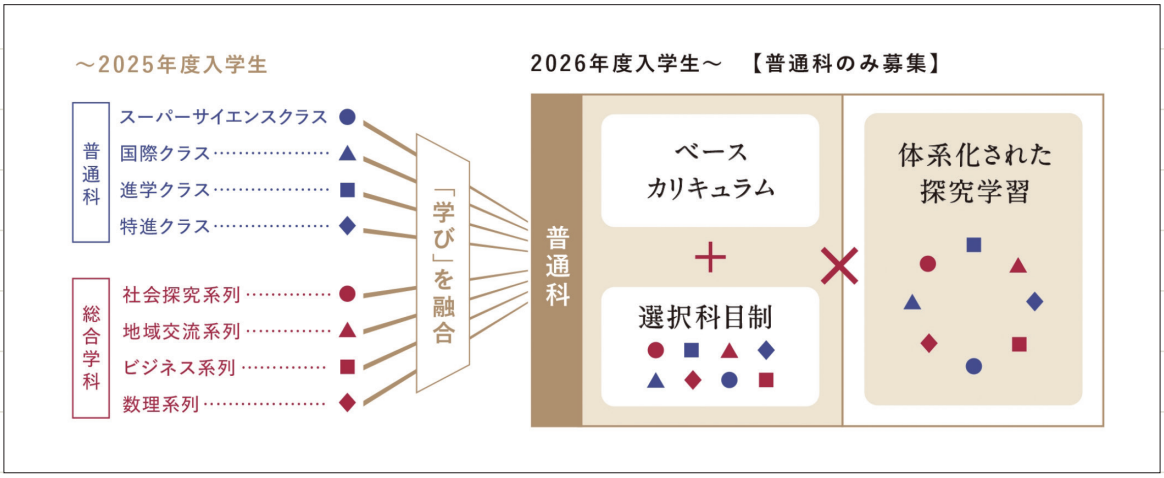
伊藤：はい。令和8年度から総合学科（社会探究系列、地域交流系列、ビジネス系列、数理系列）の募集を停止し、普通科1本にします。さらに、普通科にあった4つのクラス（スーパーサイエンスクラス、国際クラス、進学クラス、特別進学クラス）という区分もなくします。学則定員である1学年640人を維持したまま、コース分けのない普通科1本に再編するということです（**図1参照**）。

4つのクラスと4つの系列という計8つあった選択肢を1つにするということから一見、「生徒の多様な能力・適性、興味・関心等に応じた学びを実現すること」（答申「令和の日本型学校教育」の構築を目指して）という流れに反して映るかもしれません。しかし、むしろ逆。今の生徒たちの多様性の幅を考えたとき、8つでも少ないと私たちは考えました。いっそのことクラスや系列を廃止し、共通で学ぶべきことは全員共通で学んだうえで、選択科目を大幅に増やし、無限のパターンを用意したほうが、生徒個々の興味関心に合わせられるのではないか、という発想の転換です。

木村：その共通科目と選択科目について、具体的に、どのようなカリキュラムを想定しているのでしょうか?

伊藤：1年生は、ベースカリキュラムとして全員が同じ科目を履修します。2年生も基本的に同様ですが、選択科目の枠が増え（前後期各1単位）、3年生になると、各自の進路目標に合わせ選択科目がさらに増えます（2+2単位）。具体的な科目としては「データサイエンス」「国際教養」「簿記演習」「中国語」「フ

図1 普通科再編の概念図



Norihito Ito × Kentaro Kimura

ードデザイン」など。これらは、スーパーサイエンスクラスや国際クラス、あるいは総合学科で行ってきた特色ある学校設定科目がベースとなっています。また、「数学演習」や「理科演習」など一般選抜を意識した科目も数多く用意します。

これまでは2年生で文理分けをするなど、「選択してから学ぶ」体制でしたが、これからは2年生まで広く共通科目を学びつつ、興味関心や進路に合わせて選択科目から選ぶ、いわば「学びながら選択する」体制への転換を図ります。そもそも本校では理系・文系という呼称は使わないよう心掛けてきました。理科や数学あるいは国語や社会に比重が置かれることはあっても、本来、明確に二分するものではありません。子どもたちに色はついていないのに、大人の都合で色をつけるわけにはいかないと考えているからです。

木村：より自由度の高いカリキュラムになるわけですが、3年生の科目選択において、「選択しない」という選択肢もあるのでしょうか?

伊藤：仮に3年生の選択科目群のなかに、「自分の進路を考えたとき、これらの科目では、目標を達成できません」といった合理的な理由があるのであれば、推奨こそしませんが、履修しない選択も認めることになるでしょう。ですから、卒業時の取得単位数も生徒によって違うことが起こり得ます。

木村：履修しない権利が存在するというのはすごいこと。学校が用意した選択群からは選ばないけれど、「自力でこれを学びたいんだ」という意志を尊重するわけで、生徒を信頼していることが伝わります。

伊藤：誰しも、自分が必要だと思ったら何とかするものです。その必要な学びを、学校が用意しているに越したことはないですが、そうでなければ、あるいは教員との相性が合わないなどの理由があるのなら、今どき塾やICTを使った学習コンテンツに求めることもできるわけです。以前、千葉大学に飛び入学で進学したスーパーサイエンスクラスの生徒がいました。当然、高2のカリキュラムまでしか履修していませんが、大学が要求する水準は満たしていたわけです。その差分は、もちろん教員もサポートしましたが、足りない部分はICTも活用し独自に学んでいたのです。

きむら・けんたろう●2002年リクルート入社。「ケイコとマナブ」営業、「フロム・エー」「タウンワーク」の商品企画と営業企画、「ゼクシィ」の営業企画マネジャーを経て、2014年から「スタディサプリ」へ。

Norihito Ito × Kentaro Kimura

探究的な学びを意識することで、日常の授業もクリエイティブに向かう

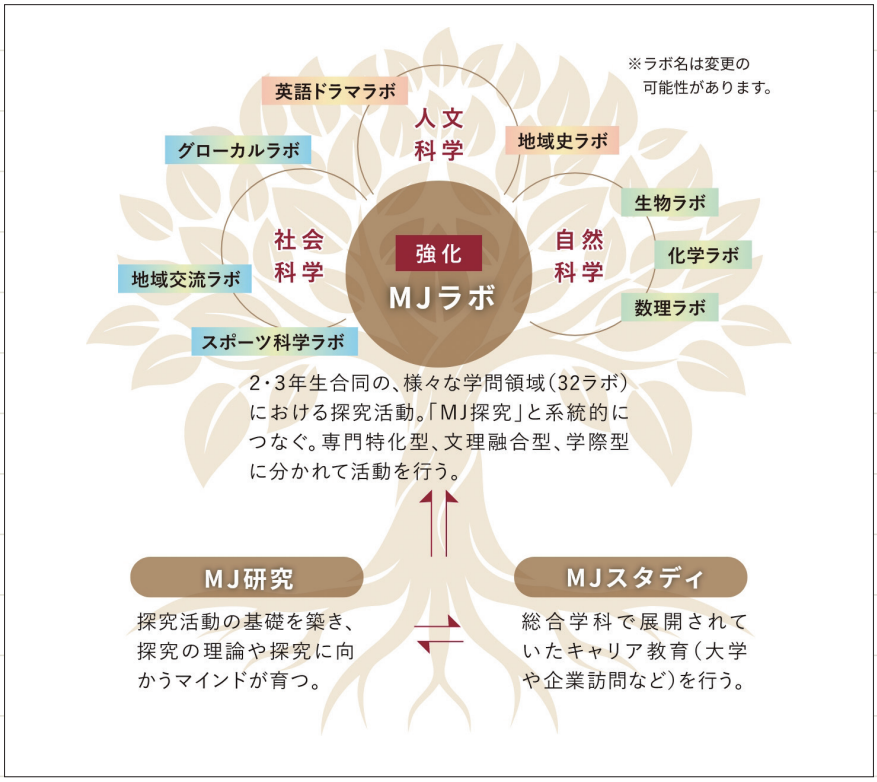
再編の核となる探究の体系化と重点化

木村：ベースカリキュラムと選択科目についてはお聞きしました。「探究」についても、体系化・重点化を図るそうですが、どのように変わるのでしょうか?

伊藤：学校外の学びの話をしたばかりですが、当然、一条校である高校でしかできないことがあります。それこそ探究的な学びであり、協働的な学びです。新しいカリキュラムにおいては、選択科目の充実に加え、探究に一層力を注ぎます。具体的には、ベースカリキュラムを精選したうえで、これまで3単位だった探究系の科目を最大6単位の履修とし、3年間の流れを体系化しました(**図2参照**)。

まず1年生の共通履修として「MJ探究」1単位と「MJスタディ」2単位を設けます。MJと

図2 「探究」体系化、重点化の概念図



Norihito Ito × Kentaro Kimura

は名城の頭文字。「MJ探究」は、探究のベーススキルやマインドを学ぶ時間です。先行研究の調べ方や論文の書き方に加え、マインドマップなど思考ツールの活用も学びます。

一方の「MJスタディ」では、インターンシップや職場見学、大学訪問などキャリア教育を行う時間。総合学科での蓄積が生かされるでしょう。また、主体的な学びのための自己調整型学習の方法論も学びます。

木村：探究活動の難しさとして、問いやテーマを決められないことがありますが、1年生にまず、学び方を学ぶとか、社会に触れる段階を設けているのは合理的ですね。

伊藤：そのうえで2・3年生で展開するのが、生徒15〜20人あたり一人の教員がつく「MJラボ」での探究活動です。大学のゼミや研究室にも似ていて、数理ラボ、英語ドラマラボ、スポーツ科学ラボなど、さまざまな学問や学際領域から32のラボを用意し、生徒の興味関心や希望に合わせてマッチングします。

一つのラボは2・3年生が混在し、学年を超えて、同じ時間と空間を共有します。もともと私が「スーパーサイエンスラボ」という活動をつくった際の設計思想であり、上級生の後ろ姿から下級生が学ぶとか、代をまたいで研究テーマを繋いでくれることを期待します。「MJスタディ」と「MJラボ」は、例えば金曜の5・6時間目など、同じ時間帯で展開する予定のため、2・3年生が活動する様子を1年生が見学することも考えています。

エポックメイキングではなく長年の蓄積を体系化したもの

木村：御校はこれまで、普通科や総合学科でも、探究的な活動に力を入れてきました。来年度からの新カリキュラムでも、これらを整理したうえで探究を軸に据えるわけですね。

伊藤：それこそ今回の改革の要です。本校は、20年以上前から、今日でいう「探究」を強みとしてきました。平成11年度設置の総合学科、平成15年度設置の普通科国際クラスでの課題研究などを皮切りに、スーパーサイエンスハイスクール（SSH）や、スーパーグローバルハイスクール（SGH）採択校として、文理を問わず高度な探究を進めてきました。

ただ、クラスや系列ごと、独自に教育コンテンツを開発してきたところもあります。それぞれ自負はあるけれど、縦割りの弊害が生じていたことも否めません。施設設備や予算、教員数などのリソースには限界があります。また、働き方改革への対応も急務となってきました。ここが今回の改革における検討会議でも大きな課題として出てきた点です。

そこで、ベースカリキュラム同様、長年培ってきた探究活動のノウハウやコンテンツを整理し、また総合学科における実学系の先生方が得意な部分も大いに生かしつつ、共通化できる部分は共通化したわけです。つまり、体系化と合理化です。傍から見ると「総合学科がなくなって多様な生徒に対応できるのか」とか

Norihito Ito × Kentaro Kimura

「特進クラスがなくなって、これまで通りの進学実績は出せるのか」といった懸念も生まれそうですが、見た目ほどエポックメイキングなことではない、というのが私個人の考えです。

しかし、これを1学年640人、全校合わせて2000人規模の学校で展開するという点で、大きな挑戦です。確かに、しっかりと個を磨く探究学習をやっている学校は全国にたくさんあります。ただ、各地の学校に見学に行くと、中高6年間かけてとか、比較的規模が小さい学校だからできることも多い。本校のような大規模な進学校で、探究の質を維持しながら継続していくために、教職員が一丸となる必要を感じています。

校内の反対と現実的工夫
同校ならではの入試事情も考慮

木村：その点、校内の調整は大変だったと推察します。探究を充実しようとすると、その分積み上がって授業のコマ数からはみ出しがちですが、そうなっていないのは、代わりにベーススカリキュラムを精選しているため。普通の進学校がやれないことをされています。特に週あたりのコマ数が多い主要教科の時数を削ることに抵抗はなかったのでしょうか?

伊藤：まさにそこなんです。公立進学校のSSH指定校ではよく「受験をとるのか、研究活動をとるのか」といった議論になるようですが、本校でも少なからずありました。「もう受験指導をしなくていいんですか」という意見もあり、校長プレゼンを何度も行い、理解を求めてきました。少し脱線しますが、教員の仕事って、少し気を抜くとルーティンに陥り、キャリアプラトー（伸びしろなき停滞）に向かいがちなんです。探究的な学びを常に意識することで、日常の授業もクリエイティブに向かうはずだとも考えています。

木村：普通科の進学校で特色教育をやろうとすると、進学実績とのトレードオフが発生することを恐れ、思い切った手が打てないという構造になりがちですからね。

伊藤：その気持ちは理解できますが、本校の進路のあり方として、冒頭申し上げた特別推薦制度を含め、約7割が年内に進路を決めています。共通テストを受験する生徒は640人中200人もいません。つまり「受験、受験」と駆り立てなくても、ある程度の進路は保障されている。だとしたら、受験対策も大事だけれど、少しでも探究に力を入れ、課題の発見・解決力や対人関係の調整力といった非認知的な能力の向上に努めようと。

それと、一般選抜を受ける生徒に対してもセーフティーネットを用意してあって、3年生の「MJラボ」は、履修単位的には前期で終了し、後期は受験対策に充ててもいいんです。必要に応じてICTの学習コンテンツを活用するとか、塾で学ぶのもOK。けれど学校としてまずは、エッセンシャルな学びを提供することに力を注ぎたいというのが私の考えです。

Norihito Ito × Kentaro Kimura

創立100周年の事業としてハードではなく教育改革に着手できたことが誇り

受験が先か、探究が先か 議論は20年近く前から始まった

木村：伊藤先生からは、信念のようなものを感じますが、昔から探究的な活動に積極的だったのですか?

伊藤：いいえ。若い頃、特に20代は受験教育一辺倒でした。化学の教員でしたが、実験もしっかりやらせていなかったと思います。

転機は平成16年度です。本校はSSHの指定を平成18年度から4期20年受けていますが、その2年前の平成16年度に、文部科学省所管のSPP=サイエンス・パートナーシップ・プロジェクトの指定を受けました。実験実習を主体とする高大連携、産学連携の学習プログラムであり、本校の初年度のテーマは「トライボロジーとその現代社会における役割」という高度な内容でした。担当責任者だった前校長の岩崎政次先生から声を掛けていただいたことで私も関わり、本校が本質的な科学教育に取り組む端緒になりました。ちなみに2期目のテーマは「バイオテクノロジーを利用した作物育種」。私が主担当となって活動を進め、その後のSSHの申請につなげることもできました。

機械工学科出身で、実学を重視されてきた岩崎先生の口癖は「本物を見せよう」でした。一方、私自身は進学校で受験勉強をガンガンやって大学に進学したタイプでしたから、岩崎先生とは当初「座学が先か、体験が先か」「受験が先か、探究が先か」みたいなことをよく議論していました。けれど次第にその圧に押され(笑)、私の中で、教育に対する向き合い方、要するに受験勉強だけではなく、体験や実験、研究、探究へのシフトが起こってきました。

もちろん、興味関心を深めるうち、「この分野を勉強しなければ」など、教科学習や受験勉強に結びつく瞬間が必ず出てきます。単純に言えば、英文の論文を読むためには、英語を学ばなければいけないわけで、この辺りのバランスをうまく保つことが、私たち高校教員

Norihito Ito × Kentaro Kimura

の使命かなと考えるようになりました。

木村：そうしたなか、子どもたちが変わっていく姿を目の当たりにしますよね。

伊藤：そうなんです。SPPやSSHに限らず、探究を軸にした教育を行うことで、生徒が変わっていく様を何度も見てきました。少し前、特進クラスに、「JAXAに勤めたい」と言い続けていた生徒がいました。彼女は、SSHの探究活動や研究機関のサイエンスキャンプに積極的に参加し、好きなことや興味を深め、楽しみながら学んだ経験を基に、総合型選抜で東北大学に進み、今春、夢が叶ってJAXAに就職しました。つい先日のH-ⅡAロケットの打ち上げの際も種子島の管制室にいたんです。これとは別に、H-ⅡAへの水素燃料のローディングを担当した卒業生もいます。このように、さまざまな先進分野で活躍し、日本や世界をリードする人を育む。受験の実績より、そういうことが私たちにとっての成功体験かな、と。そのため、スーパーサイエンスクラスや国際クラスで行ってきた高次の探究を、学校全体に広げていきたいと考えています。

受け身の生徒にどう響くか
成績中下位層の成長に期待

木村：先生自身の背景がよくわかりました。私自身、選択授業を増やし、探究に力点を置く新カリキュラムに期待していますが、お話を伺いながら、「仮に、この挑戦が失敗するとしたら、どこだろうか、と意地悪く考えていました。強いて言えば、自分自身で判断し、行動できる生徒はぐんぐん伸びる一方で、与えられることに慣れた、あるいはリードされることで成長するタイプの生徒にとっては、引っかかるところが少なく、しかしベースカリキュラムの時数が減るため、学校全体としての学力水準が下がる可能性はあるかと思いました。

伊藤：確かに、与えられて当然という生徒からすれば、「私学なのに、思ったほど先生が教えてくれない」という不満は出るかもしれません。今までも、「グループ学習やアクティブラーニングって授業なのか」という苦情もありました。けれど、座学ではない、こうした学びこそこれか

Norihito Ito × Kentaro Kimura

らの社会で必要なのだと丁寧に説明し、理解を促してきました。課題を発見し解決するって、社会に出れば誰しもが行っていること。そのとき文献にあたることも必要だし、他者との協働も必要です。そうした探究の基礎的な概念形成を早いうちから行う必要があります。ガンガン受験勉強をさせる高校があっていいけれど、うちは違います。

木村：これまでも、多くの探究の機会を提供しているわけで、上位層、あるいは探究心がある生徒は、変わらず伸びていくと思います。そこにプラス、自分の興味関心に出合う機会が増えることで、真ん中や成績下位層の子たちにどういう変化が起きるのか。探究起点での意欲の形成と学力の向上が、どれくらいはまるのか非常に興味があります。

伊藤：その層が成長してくれることが一番嬉しいです。すごくパッシブな子っているんです。スーパーサイエンスクラスでもいました。人とのコミュニケーションが苦手で、発表などのイベントも避けがち。自分が何に興味関心があるかもわかっていない様子でした。それでも、ある程度負荷をかけることは教育上、大切なことなので、その子の性格や力に応じたチャレンジも課していました。そうやって2年ほど見守っていると、何かしら引っかかってくるテーマが生まれるんです。そして、似た気質の生徒と出会い、協力して立派な発表をして卒業しました。もちろん、在学中に花開かないように見える生徒もいます。でも、卒業後何年かして遊びに来て、「ここで学んだアレコレが、今の自分に役立っています」みたいな話をしてくれることも少なくない。教育って、遅効性なんですよね。

木村：本日は、新カリキュラムの中身だけではなく、そこに至る歴史や、先生の思い、現実的な課題まで深い話を聞けて良かったです。

伊藤：こちらこそありがとうございます。本校は来年度100周年を迎えます。周年記念事業というと、記念館の建設など形に残るものが多いですが、そうしたハードではなく、メインの事業として、これからの社会を見据えた普通科への「シンカ」という教育改革に着手することができたことを誇りに思っています。

名城大学附属高校

1926年創立。1948年名古屋文理高校として開校。1951年名城大学附属高校に改称。2006年スーパーサイエンスハイスクール(SSH)指定校(現在4期20年目)。2014年スーパーグローバルハイスクール(SGH)指定校。指定終了後SGHネットワーク参加校として活動。生徒数約2000人。愛知県名古屋市。